

小学校体育における「運動話材フレーム」の作成と活用事例

鈴木 一成

保健体育講座

Creating “a Language Activity Frame of Physical Education” and the Practice

Kazunari SUZUKI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

小学校体育における「言語活動の充実」の実践上の問題の一つとして、「言語活動と学習評価の関係が不明確なこと」がある。この解決に向けての一つの取り組みとして、本研究では、現行小学校学習指導要領の指導内容と、目標に準拠した評価（観点別学習状況の評価）の考え方から「運動話材フレーム」の作成と活用を試みることを目的とした。その結果、①「運動についての思考・判断」の内容が中核的な運動話材となり、評価対象となること。②「運動についての思考・判断」を評価するためには、「前提となる知識」として、児童が行い方（態度との関連）と動き方（技能との関連）を知るための話材が位置付き、この場合は観点別学習状況の評価対象外となることといった2点を特徴とする「運動話材フレーム」を作成した。活用事例からは、体育の「言語活動の充実」の内実を評価の観点から検討した。今後の課題は、領域別の運動話材の内容を領域のねらいや領域間及び領域内の整合性から検討していくことである。

Keywords : 言語活動の充実、小学校体育、評価

I 問題と目的

「各教科等における言語活動の充実」は、生きる力の理念の下、現行改訂で充実すべき重要事項の第一に取り上げられたものである¹⁾。そして、小学校学習指導要領の改訂から6年が経過し、次期改訂への検討が進められている。なかでも、次期学習指導要領改訂の方向性を示唆する「21世紀型学力」には「言語力」が基礎力として位置付いている²⁾。そのため、「言語活動の充実」における実践上の問題を整理し、その解決策に向けた提案が求められているといえる。

小学校体育における「言語活動の充実」には、どのような実践上の問題があるのだろうか。水戸部は「指導のねらいと言語活動との関連がはっきりせず、当該教科等のねらいに応じてどのような力が付いたのか不明確な場合がある」とし、「言語活動の充実」は、「あくまで当該教科等の指導のねらいを実現するための手立てであり、ねらい自体が不明確であれば、いくら言語活動を位置付けても効果は上がりにくい」と実践上の問題を指摘している³⁾。また、森は「言語活動の充

実」をテーマとした体育授業の事例を検討し、『対話活動・記述活動の導入で「言語活動の充実」に至り、その結果、話し合いが活発になったというのでは、言語活動が目的にあり、体育はその手段になる。これでは教科の目標が損なわれる』という懸念を示し、「目的－手段の問題」を指摘している⁴⁾。

本稿では体育固有の言語活動の充実を対象とするため、これらの考えを支持し、「言語活動を充実すること自体が目的ではなく」⁵⁾、「体育科の目的（指導のねらい）」が目的、言語活動は手段という立場にたつ。「言語活動は手段」とした場合、「体育科の目的（指導のねらい）」のとらえ方が問題になる。実践上の問題を対象化した場合、「体育科の目的（指導のねらい）」とは学習指導要領体育編の目標を示すため、目標に準拠した評価に対応することになる。小学校体育における目標に準拠した評価とは観点別評価規準であり、「運動の技能」だけではなく、「運動への関心・意欲・態度」と「運動についての思考・判断」がある。水戸部は体育の目的（指導のねらい）と言語活動の関係の問題には、学習評価との関係をどうとらえるかが不明確なま

ま指導がなされる場合があると指摘している⁶⁾。また、森は「思考・判断の評価基準は課題の設定や運動の計画、反省などを評価する規準である。そのため、授業でこれを対話活動・記述活動で行えると考える教師は多い。それでも評価規準の確立が曖昧で、話し合いの活発さ、学習カードへの記述量で評価するケースもある」と指摘し、「言語活動の充実」に至る評価の観点を確立することと、実践との関連でその具体的活動を再考する必要があるとしている⁷⁾。さらに、高田は「体育科でも言語活動そのものが学習のねらいにはならない。学習が楽しいか、楽しくないかで言語活動が活発になるかどうか大きく変わってくる。まずは楽しい授業が前提。技能、態度、思考・判断という体育の学習内容に絡めて、子どもたちの話材を焦点化していくこと。運動という体験を絶好の話材とし、子ども同士の学習を深める中で、言語活動の充実を図っていききたい」としている⁸⁾。これらの指摘は、指導内容及び学習評価と「言語活動の充実」が関連していないという実践上の課題が残されているというものであると考える。この課題を解決するには、体育授業における「言語活動の充実」をどのように図ればよいかという具体的な枠組みが必要であると考える。

そこで本研究では、現行小学校学習指導要領体育編の指導内容と、観点別学習状況の評価の考え方から、体育授業における運動の話材（以下「運動話材」とする）を整理した枠組みである「運動話材フレーム」の作成とその活用について試案の提示を目的とする。

Ⅱ 「運動話材フレーム」の作成

1 運動話材と指導内容の関連

現行学習指導要領の体育における指導目標(内容)の構造の特徴は、身体能力(体力+技能)や態度(社会的な態度)を育成するためのベースとして知識が位置づき、さらに思考・判断を介在させて指導目標(内容)を達成させようとしているところにある⁹⁾。この構造について高橋は「究極的な目標である『生涯スポーツの継続的な実践』や『運動やスポーツへの価値的な態度』の実現をめざす上で、学び方(思考・判断)の学習が重要な役割を果たすという考えがある。そして、言語活動の充実を図るためには、体育の学び方(思考・判断)の学習を重視する必要がある」としている¹⁰⁾。この考えから、小学校体育における指導内容と言語活動との関連をみると、「思考・判断」を重視し、身体能力(体力+技能)や態度(社会的な態度)を育成するためのベースとなる知識が運動話材となると考える。なお、指導内容は学習指導要領解説体育編¹¹⁾に示されているので、この指導内容から運動話材を明示することができると思われる。

2 運動話材と学習評価の関連

(1) 言語活動と体育の観点別学習状況の評価

各学校は、学習指導要領等に従い、地域や学校の実態等を考慮して適切な教育課程を編成し、学習指導と学習評価を実施する役割を担っている。佐藤は「学習評価においても学習指導要領等の改正の趣旨を反映するには、教育基本法及び学校教育法の改正によって明らかになった学力(①基礎的、基本的な知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学習意欲)の3つの要素を踏まえて評価の観点(『関心・意欲・態度』『思考力・判断力・表現力』『技能』『知識・理解])を整理することが適当である」としている¹²⁾。さらに、「小学校体育においては、学習指導の改善や教育課程全体の改善につながる学習評価の意義・目的を踏まえ、言語活動を通して育成する、思考力、判断力、表現力等について、各教科の対応する観点において適切に評価することが求められるとして、全体の評価観点は『技能・表現』は『技能』へ、思考・判断は『思考・判断・表現』とされたが、教科の特性を踏まえて、小学校体育の運動領域は従来と変更なしの『運動への関心・意欲・態度』『運動についての思考・判断』『運動の技能』の3観点となった」とまとめている¹³⁾。このことから、小学校体育の言語活動における話材は「運動への関心・意欲・態度」「運動についての思考・判断」「運動の技能」の3観点による学習状況の評価に基づくと考え、以下、言語活動と3観点を関連を検討していく。

(2) 運動話材と運動への関心・意欲・態度

学習指導要領においては「態度」が明確に示されている。具体的には「進んで運動に取り組む」といった運動への愛好的な態度、「友達と協力したり、ルールを守ったりして運動すること」などの協力・公正に関する態度、「運動の場や用具の安全を確かめる」などの安全に関する態度がある¹⁴⁾。これに加え、学習指導要領の態度には「準備や片付けをする」などの責任に関する態度を読み取ることができる。言語活動と運動への関心・意欲・態度の関連については、「運動への愛好的な態度(愛好的)」「協力・公正に関する態度(協力・公正)」「責任に関する態度(責任)」「安全に関する態度(安全)」の4つが運動話材の具体的な手掛かりとなる。

(3) 運動話材と運動についての思考・判断

運動についての思考・判断の評価では、技能(動き)を身に付けるために、運動する場や練習方法を選んだり、技能(動き)のこつを見付けたり、簡単な作戦を立てたりすることなど、自己やチームの課題解決に向けた取組を評価することである。そのためには、練習の仕方や動き方など「工夫する」ための必要な知識を押さえておくことが前提となる。その上で、「～見付けたり、選んだり」しているなどの学習状況を評価することになる¹⁵⁾。これらをまとめると図1となる。「前

〈評価の観点及びその趣旨〉

自己の能力に適した課題の解決を目指して、運動の仕方を工夫している。

〈評価規準の設定のキーワード〉

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
前提の知識	〇〇の行い方を知るとともに	動き方や技のポイントを知るとともに	課題の解決の仕方を知るとともに
課題解決	友達のよい動き方を見付けている。	自分の力に合った課題を選んでいく。	自分の課題に合った練習の場や方法を選んでいく。
工夫	いろいろな運動の仕方を見付けていく。	練習方法や練習の場を選んでいく。	〇〇の挑戦の仕方を選んでいく。

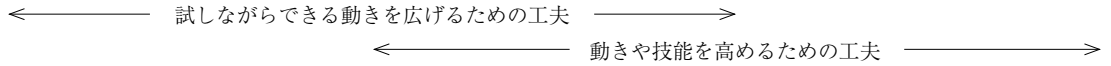


図1 「評価の観点及びその趣旨」と「評価規準の設定のキーワード」¹⁵⁾

「前提の知識」は、先の言語活動と学習内容についての検討を踏まえると、現行学習指導要領の体育の指導目標（内容）の構造から「行い方」と「動き方」に分けることができる。「行い方」の具体的な手掛かりは「態度」の内容であり、「動き方」の具体的な手掛かりは「技能」の内容である。いずれも運動話材の具体的な手掛かりとなる。

(4) 運動話材と運動の技能

運動の技能の評価では、運動を楽しく行うための基本的な動きや技能を身に付けているかを評価する。第1学年及び第2学年、第3学年及び第4学年については、単に動きが身に付けばよいということではなく、各種の運動を楽しく行う中で基本的な動きを広く身に付けていくことが大切である¹⁶⁾。山口は「言語活動と技能の関連では、技能差によって発話内容が変わる」としている¹⁷⁾。また、石田は「客体としての技術や戦術のうち、教えるべき中味を焦点化すること」を指摘している¹⁸⁾。体育授業では、運動の技能を具体的手掛かりとした話材が必要となると考える。

(5) 「運動話材フレーム」の作成

小学校体育における運動話材について、指導内容及び観点別学習の評価との関連を検討したことを次の二

点にまとめることができる。

第一は、学習内容との関連では、「運動についての思考・判断」の内容が中核的な運動話材となる。そのため、学習評価との関連では、観点別学習状況の評価とした場合、「運動についての思考・判断」の評価対象となる。第二は、「運動についての思考・判断」とは「工夫・課題解決」であり、児童が「見付ける・選ぶ・組み合わせる・立てる・取り入れる」ためには「前提となる知識」が前段に位置付く。児童が行い方（態度との関連）と動き方（技能との関連）を知ることが重要となり、この場合は観点別学習状況の評価対象外となる。

森は「技能をテーマとする『話し合い、教え合い』には運動観察をとまなう。『学習カード』は運動の省察を促す可能性をもつ。このとき、観察や省察のフレーム形成が重要になると考える。運動の『何を見るか』を定めることは観察・省察のフレーム形成になる。子どもにこれを求める場合、教師自身がこれらを学習指導できねばならない」としている¹⁹⁾。森の「観察や省察のフレーム形成」という考え方と、これまでの二点の検討をふまえて、「運動話材フレーム」を作成した。表1は「走・跳の運動」小学校3・4年用の「運動話材フレーム」である。

表1 「運動話材フレーム」(「走・跳の運動」小学校3・4年用)

区分	動詞	行い方の話材	動き方の話材
前提の知識	知る	走の運動や跳の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走(争)の仕方	走の運動や跳の運動の動き方や動きのポイント
		具体的手掛かり(態度との関連) [愛好的] 運動に進んで取り組むこと [公正・協力] きまりを守り、友達と励まし合って練習や競走(争)をしたり、勝敗の結果を受け入れたりすること [責任] 用具の準備や片付けを友達と一緒にすること [健康・安全] 場の危険物を取り除いたり、用具の安全を確かめたりすること	具体的手掛かり(技能との関連) [かけっこ・リレー] 調子よく走る [小型ハードル走] 調子よく走り越える [幅跳び] 短い助走から調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ [高跳び] 短い助走から調子よく踏み切って高く跳ぶ
工夫・課題解決	選ぶ	自分の力に合った練習方法や練習の場・競走(争)の規則を選ぶ	自分の力に合った課題

Ⅲ 「運動話材フレーム」の活用事例

1 「運動話材フレーム」の活用のねらい

今回の「運動話材フレーム」の活用のねらいは、現職教師（教師1年目）の体育授業の困っている点を受けたものである。それは、体育授業における「言語活動の充実」をどのように図ればよいか分からないというものである。そこで、「運動話材フレーム」を授業の省察のフレームと考え、授業後に「運動話材フレーム」を基に授業者が振り返ることで、体育授業における「言語活動の充実」を検討する手掛かりを得ることをねらいとした。

2 「運動話材フレーム」の活用の仕方

(1) 単元前の事前説明と「運動話材フレーム」の修正

筆者が授業者に「運動話材フレーム」の走・跳の運動（小学3・4年用）を授業前に説明した。その際、そこで二点を改善することとした。一つ目は本単元が走の運動に限定したため、「走の運動」「競走」の話材に限定したこと。もう一つはチェックしやすいように

「チェック項目欄」を設定したことである。これを「走の運動話材フレーム」とした（表2）。

(2) 「走の運動話材フレーム」の活用

授業後に授業者が本時の授業を想起して、「走の運動話材フレーム」の該当する項目にチェックした。それを基に、本授業における「言語活動の充実」について省察した。

(3) 「運動話材フレーム」の活用の実際

① 授業の概要

表3に授業の概要を示す。

② 「走の運動話材フレーム」による授業後の省察

表4は第1時の「走の運動話材フレーム」である。第1時は単元の導入として、走路の指示と対戦相手や対戦グループの確認、毎回の勝敗によってスタート位置を変えてハンディーキャップを付けることなどの約束毎に多くの時間を割いた。そのため、「走の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走の仕方を知る」にチェックされた。授業での走距離は最小で1m、最大で15mであり、マッチレースの回数が22回であったことから「〔愛公的〕運動に進んで取り組むこ

表2 「走の運動話材フレーム」

区分	動詞	行い方の話材	動き方の話材
前提の知識	知る	<input type="checkbox"/> 走の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走の仕方	<input type="checkbox"/> 走の運動の動き方や動きのポイント
		具体的手掛かり（態度との関連） <input type="checkbox"/> 〔愛好的〕運動に進んで取り組むこと <input type="checkbox"/> 〔公正・協力〕きまりを守り、友達と励まし合っ て練習や競走をしたり、勝敗の結果を受け入れ たりすること <input type="checkbox"/> 〔責任〕用具の準備や片付けを友達と一緒にす ること <input type="checkbox"/> 〔健康・安全〕場の危険物を取り除いたり、用 具の安全を確かめたりすること	具体的手掛かり（技能との関連） <input type="checkbox"/> 〔かけっこ〕調子よく走る
工夫・課題解決	選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った課題

■チェック有り、□チェック無し

表3 授業の概要

単元名	走の運動 3時間扱い 平成26年9月実施		
授業者	現職教師（教職1年）		
学習者	A市B小学校4年2組（男子15名、女子14名、計29名）		
単元計画・評価計画			
	1	2	3
単元計画	<input type="checkbox"/> W-up 折り返しの運動（歩・走・スキップ・ギャロップ）	<input type="checkbox"/> W-up 折り返しの運動（歩・走・スキップ・ギャロップ） 変形スタートダッシュ	<input type="checkbox"/> W-up 折り返しの運動（歩・走・スキップ・ギャロップ） 変形スタートダッシュ
	<input type="checkbox"/> Trial バトル走(1m/3m/5m/10m)	<input type="checkbox"/> Trial バトル走(3m/5m/10m/20m/25m)	<input type="checkbox"/> Trial バトル走(5m/10m/20m/30m)
評価計画	運動への関心・意欲・態度 運動に進んで取り組もうとしたり用具の準備や片付けを友達と一緒にしようとする。	運動の技能 調子よく走ることができる。	運動についての思考・判断 自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶことができる

表4 第1時の「走の運動話材フレーム」

区分	動詞	行い方の話材	動き方の話材
前提の知識	知る	<input checked="" type="checkbox"/> 走の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走の仕方	<input type="checkbox"/> 走の運動の動き方や動きのポイント
		具体的手掛かり（態度との関連） <input checked="" type="checkbox"/> 〔愛好的〕運動に進んで取り組むこと <input type="checkbox"/> 〔公正・協力〕きまりを守り、友達と励まし合っ て練習や競走をしたり、勝敗の結果を受け入 れたりすること <input checked="" type="checkbox"/> 〔責任〕用具の準備や片付けを友達と一緒にす ること <input type="checkbox"/> 〔健康・安全〕場の危険物を取り除いたり、用 具の安全を確かめたりすること	具体的手掛かり（技能との関連） <input type="checkbox"/> 〔かけっこ〕調子よく走る
工夫・課題解決	選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った課題

■授業者チェック有り □授業者チェック無し

表5 第2時の「走の運動話材フレーム」

区分	動詞	行い方の話材	動き方の話材
前提の知識	知る	<input type="checkbox"/> 走の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走の仕方	<input checked="" type="checkbox"/> 走の運動の動き方や動きのポイント
		具体的手掛かり（態度との関連） <input checked="" type="checkbox"/> 〔愛好的〕運動に進んで取り組むこと <input type="checkbox"/> 〔公正・協力〕きまりを守り、友達と励まし合っ て練習や競走をしたり、勝敗の結果を受け入 れたりすること <input type="checkbox"/> 〔責任〕用具の準備や片付けを友達と一緒にす ること <input type="checkbox"/> 〔健康・安全〕場の危険物を取り除いたり、用 具の安全を確かめたりすること	具体的手掛かり（技能との関連） <input checked="" type="checkbox"/> 〔かけっこ〕調子よく走る
工夫・課題解決	選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った課題

■授業者チェック有り □授業者チェック無し

と」にもチェックされた。また、走距離を長くするための目印となるカラーコーンの設置をグループで行ったり、役割を決めて片付けたりする際に、誰がどれを運ぶのかをグループで確認したことにより、「〔責任〕用具の準備や片付けを友達と一緒にすること」にチェックが入れられた。一方、授業中では、ゴール直後に対戦相手の友達と勝敗を確認したり、スタート直前にスタート位置を確認したりする姿が見られた。しかし、「公正・協力」の項目にチェックがないのは、「勝敗を受け入れることには至っていない」との授業者の判断によるものであった。これらのことから、本授業での「言語活動の充実」は、評価計画に即して、「運動への関心・意欲・態度」が評価対象となるため、具体的には「愛公的・責任」の到達具合によって確認できると考える。

授業後の授業者の感想では「子どもたちの走りを見てみると身体の軸がぶれてしまい、左右に身体が流れたり、足と手の動きの「リズムやテンポがバラバラだと感じた。また、足が流れてしまうためピッチが上がりきらずにゴールする児童も多く見られた。」とした。

「走の運動話材フレーム」のチェック項目はすべて「行い方の話材」であったことから、第2時では「動き方の話材」となるようにしたいと述べた。

表5は第2時の「走の運動話材フレーム」である。第2時は、走路の指示や競走の仕方の確認の時間は「前回と同じ」と授業者が子どもに伝えた。授業前半は「歩・走・スキップ・ギャロップ」の条件変化及び3から10mの距離を適宜授業者が提示して、折り返す運動を行った。「着いた足が前にきているか」「しっかり地面に力を加えているか」「足を開いてジャンプするのと閉じるのはどちらが高くジャンプできるか」と授業者が子どもに問い掛けながら運動させた。中盤から後半は3m先にある旗を倒す競走（3mバトル走）から始まり、走距離を徐々に伸ばし、最大で25mとした。レースの度に「足を前へ・前へ・前へ」や「着いた足よりも前へ」と授業者は強調した。グループで何勝何敗なのかを確認することで、子どもたちは同じチームの友達に「がんばって！」「足を前だ！」と声援を送る姿に見られた。これらのことから、「動き方の話材」の欄にある「走の運動の動き方や動きのポイント」に

表6 第3時の「走の運動話材フレーム」

区分	動詞	行い方の話材	動き方の話材
前提の知識	知る	<input type="checkbox"/> 走の運動の動きを身に付けるための練習の仕方・仲間との競走の仕方	<input type="checkbox"/> 走の運動の動き方や動きのポイント
		具体的手掛かり（態度との関連） <input type="checkbox"/> 〔愛好的〕運動に進んで取り組むこと <input checked="" type="checkbox"/> 〔公正・協力〕きまりを守り、友達と励まし合って練習や競走をしたり、勝敗の結果を受け入れたりすること <input type="checkbox"/> 〔責任〕用具の準備や片付けを友達と一緒にすること <input type="checkbox"/> 〔健康・安全〕場の危険物を取り除いたり、用具の安全を確かめたりすること	具体的手掛かり（技能との関連） <input type="checkbox"/> 〔かけっこ〕調子よく走る
工夫・課題解決	選ぶ	<input checked="" type="checkbox"/> 自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶ	<input type="checkbox"/> 自分の力に合った課題

■授業者チェック有り □授業者チェック無し

チェックが入れられた。第1時の反省を受け、授業者が意図的に「動き方の話材」を選択した。また、「足を前に送る動きが大きくなった児童が多くなったように感じた。」と授業者は本時の感想を述べた。第1時同様にマッチレースの回数が保障されていたことから「〔愛公的〕運動に進んで取り組むこと」にもチェックされた。また、「〔公正・協力〕」の項目にチェックがないのも、「勝敗を受け入れることには至っていない」との授業者の判断によるものであった。これらのことから、本授業での「言語活動の充実」は、評価計画に即して、「運動の技能」が評価対象となるため、具体的には「調子よく走ること」の到達具合によって評価した。一方本時の評価計画外である「運動への関心・意欲・態度」の「愛公的・責任」は、授業中の児童の様子や学習カードの「何度もやりたい」「絶対勝ちたい」といった記述内容を基に、評価計画を見直した。しかし、評価計画通りに「運動への関心・意欲・態度」は評価対象外とした。

表6は第3時の「走の運動話材フレーム」である。第3時は、「〔公正・協力〕きまりを守り、友達と励まし合って練習や競走をしたり、勝敗の結果を受け入れたりすること」と「自分の力に合った練習方法や練習の場・競走の規則を選ぶ」の2つにチェックがあった。一つ目の「公正・協力」については、第1時と第2時の「勝敗を受け入れることには至っていない」という授業者の反省を受けたものである。4人1組のグループで、ゴールにある旗を倒す競走で走距離を5m・10m・20m・30mと伸ばしていった。対戦相手は固定し、「勝ちなら次回のレース時は一足分後ろからスタート」と勝敗の結果によってスタート位置を変えて、ハンディーキャップを付けた。勝敗の結果からスタート位置を走者だけではなく、チーム同士の合意で決定していった。「本時のレース数は32本であったことが、勝敗の結果を受け入れて次回のレースでリベンジを図ること

に至ったのではないかと授業者は述べた。これらのことから、本授業での評価計画の「運動についての思考・判断」が評価対象であるため、具体的には「自分に合った競走の規則を選ぶこと」の到達具合によって、本時の「言語活動の充実」を確認できたと考える。また、「運動への関心・意欲・態度」の「公正・協力」は評価計画外ではあるが、指導したことを評価するという視点で再度、評価計画を見直した。「運動への関心・意欲・態度」に至る「言語活動の充実」があったとの理由で、「公正・協力」を評価対象とした。

IV 結語

本研究では、現行小学校学習指導要領体育編の指導内容と、観点別学習状況の評価の考え方から、体育授業における運動話材を整理した枠組みである「運動話材フレーム」の作成とその活用について試案の提示を目的とした。

本研究で作成した「運動話材フレーム」は、①「運動についての思考・判断」の内容が中核的な運動話材となり、評価対象となること。②「運動についての思考・判断」を評価するためには、「前提となる知識」として、児童が行い方（態度との関連）と動き方（技能との関連）を知るための話材が位置付き、この場合は観点別学習状況の評価対象外となることといった2点と、森の「観察や省察のフレーム形成」という考え方をふまえた。また、「運動話材フレーム」を作成した活用事例からは、授業者の省察のフレームとして、体育の「言語活動の充実」について評価の観点から検討することができた。

今後の課題は、領域別の運動話材の内容を領域のねらいや領域間及び領域内の整合性から検討していくことである。

引用参考文献

- 1) 中央教育審議会答申(2008)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(平成20年1月17日)、p 52
- 2) 国立教育政策研究所(2013)「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理解」国立教育政策研究所ホームページ、<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf> (Accessed November, 18, 2014)
- 3) 水戸部修治(2013)「言語活動の充実の趣旨と実施上の課題」、初等教育資料No. 901、pp 2-6
- 4) 森勇示(2012)『体育科における「言語活動の充実」への懸念』、愛知教育大学保健体育講座研究紀要37、pp 7-13
- 5) 文部科学省(2011)「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて(小学校版)」、教育出版株式会社、pp 167-168
- 6) 前掲書3) pp 4-5
- 7) 前掲書4) pp 10-12
- 8) 高田彬成・津田正之・岡田京子・筒井恭子・森良一(2013)「各教科等の特質を踏まえて言語活動の充実と授業改善(その2)」、初等教育資料No. 902、pp 14-23
- 9) 文部科学省(2008)「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会体育分野のワーキンググループにおける審議検討について」、p 13
- 10) 高橋健夫(2011)『体育における「言語活動の充実の展開方向』、体育科教育62(6)、大修館書店、pp 14-18
- 11) 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説体育編」、東洋館出版社
- 12) 佐藤豊(2010)「いま、体育の学習評価はどう変わろうとしているのか」、体育科教育58(6)、大修館書店、pp 15-19
- 13) 佐藤豊(2012)「新学習指導要領に基づく指導と評価の在り方」、体育科教育学研究28(1)、日本体育科教育学会、pp 45-50、
- 14) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2011)「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校体育」教育出版、2011、pp 63
- 15) 前掲書14) p 69
- 16) 前掲書14) p 74
- 17) 山口孝治(2014)「運動の得意な子と苦手な子の言語的相互作用の内実」、体育科教育62(6)、大修館書店、pp 14-17
- 18) 石田智巳(2011)「戦後の体育科教育は言語活動をどう扱ってきたのか」、体育科教育59(11)、大修館書店、pp 24-27
- 19) 前掲書4) p 12

(2014年11月19日受理)